

ポルトガルにおける国際学術交流の実際 第2報 (Sport Lisboa e Benfica および ERISA における活動) -鍼医学を中心として-

鶴 浩幸*1), 2), 3), 4), 5), 6), 7)

¹⁾明治国際医療大学 鍼灸学部, ²⁾明治国際医療大学 国際交流推進センター, ³⁾クリニカ・ツチャ(ポルトガル),
⁴⁾ポルトガル医師電気鍼協会, ⁵⁾ポルトガル統合医療連盟, ⁶⁾Sport Lisboa e Benfica,
⁷⁾Escola Superior de Saúde Ribeiro Sanches(ERISA 大学, Lusófona Group)

要 旨 筆者は2019年1月から2022年5月まで明治国際医療大学と包括的学術協定を締結しているポルトガルの各施設への海外業務を兼ねた留学研修を行った。

第1報では主に、ポルトガル医師電気鍼協会、ポルトガル統合医療連盟、ツチャ・ペイン・クリニック、などにおける国際学術交流について報告したが、本報では主に、Sport Lisboa e Benfica および Escola Superior de Saúde Ribeiro Sanches, などにおける国際学術交流について報告する。

Key words ポルトガル Portugal, 国際学術交流 international academic exchange, 鍼医学 acupuncture medicine, スポーツ sport, 高等教育機関 higher education institutions

I. はじめに

筆者は第1報¹⁾で報告したように、2019年から2022年までの期間において、明治国際医療大学との包括的国際学術協定に基づき、ポルトガルの各関係機関において海外業務を含む留学研修を実施させて頂いた。本留学研修中には、コロナウイルスの世界的パンデミックやロシアとウクライナの戦争など、非常に大きな事象が起こったが、このような不測の事態においても、物事に冷静に対処していく精神力が養われたことなど、筆者の留学研修はさらに意義

深いものとなったように感じている。

本報では主として、Sport Lisboa e Benfica (スポーツ・リスボア・エ・ベンフィカ) および Escola Superior de Saúde Ribeiro Sanches(ERISA 大学, ルゾフナ・グループ), などにおける国際学術交流の成果とその実際について報告する。

II. ポルトガルにおける主な留学研修機関とその招聘状

以下に、ポルトガルにおける主な留学研修機関とその職位および招聘状について記載する。

1) Sport Lisboa e Benfica : 招聘教授

スポーツ・リスボア・エ・ベンフィカには、鍼医

*連絡先 : 〒629-0392 京都府南丹市日吉町
明治国際医療大学 鍼灸学部
E-mail: h_tsuru@meiji-u.ac.jp

学の研究や留学研修を目的に出向することとなり、当該施設から招聘状が発出された。

2) ERISA (エリーザ) : 教授および健康科学と技術の研究委員会委員 (Nucleus of Research in Health Sciences and Technologies)

ERISA からは、日本鍼灸の教育や研究活動を行うとともに、ERISA の研究ユニットである「健康科学と技術の研究委員会」において ERISA と明治国際医療大学の学術協定に基づいた協力を求められ、学内調整を経て招聘された。ERISA からは本学の対応に最大の感謝を頂いた。

III-1. 留学研修機関の概略

本留学研修における活動には、「国際学術交流・国際活動・国際協力」などが含まれる¹⁾が、これらの活動の拠点となった Sport Lisboa e Benfica と ERISA の概要は次のとおりである。

1) Sport Lisboa e Benfica は、あらゆるスポーツ選手を育成、教育する巨大スポーツ組織であり、特に世界的有名なのはプロサッカーチームである(図1)。



図1 ベンフィカ・スタジアム

サッカー以外にも多くのスポーツにおいて、オリンピックのメダリストをはじめ、世界チャンピオン、ヨーロッパ・チャンピオン、ポルトガル・チャンピオン、などが所属している。

ポルトガルではサッカーは国民的スポーツであり、

聞いたところでは、大小合わせて 400 ほどのクラブチームがあると言われており、その頂点に位置するのがこのベンフィカである。

Clinica Benfica (クリニカ・ベンフィカ、図2)はベンフィカ・スタジアム内にあるクリニックで、当該スタジアムは約6万5千人を収容できる(図1)。



図2 クリニカ・ベンフィカ

Sport Lisboa e Benfica のチームカラーは赤であり、雌のワシであるヴィクトリアがベンフィカの象徴である。

なお、当該クリニックはコロナのパンデミックにより閉鎖され、筆者のポルトガル在留時にはコロナ以前のような通常業務が再開されるには至らなかった。

2) ERISA はリスボンにある高等教育機関である(図3, 4)。ERISA が所属するルゾフナ・グループは超巨大組織である。グループ全体では約 25,000 人の学生が在籍しており、ポルトガルの人口は約 1,037 万人であることを考慮すると、ポルトガルにおける最大の私立学校組織といえる。ルゾフナ・グループには ERISA やルゾフナ大学、その他の大学や学校などが種々ある。

ルゾフナ・グループは理学療法などの医療系大学だけでなく、工学、法学、教育学、情報学、事務・経営学、ビジネス、獣医学、などの学校や大学院なども有する。この他にも、前述のような高等教育機関だけで

なく、幼稚園や小学校、病院やクリニックなども持っている。



図3 ERISA



図4 ERISA

前述したように、ERISAはルゾフナ・グループのメンバーであるが、近年、そのグループとしての結びつきを強調するようになった。ルゾフナ・グループにおいて協力可能な施設は、互いに協力する体制が構築されている。ERISAには鍼学・実験生物医学・薬学・看護学・医用画像および放射線療法学・オステオパシー学などの学部がある。また、生物分析と制御・老年学・法医学および刑事研究・家族とコミュニティサービス・栄養補助食品とオーガニック食品などの高等専門学科があり、日本に当てはめると、大学と専門学校の両方のコースを持っている学校と考えられる。

ERISAの名前の由来になった人物は、Dr. António Nunes Ribeiro Sanchesであり、生没年は1699年-1783年である。彼はマルチな才能を持ったポルトガ

ル人であり、ヨーロッパ各地で研鑽を積んだ人物といわれている。また、ポルトガルの医師、哲学者、教育学者、歴史家であった偉大な知識人とされている。

III-2. 各留学研修機関における国際学術活動の実際

1) Sport Lisboa e Benfica における Clinica Benfica での活動

当該クリニックでは、筆者には鍼のスペシャリストとしての治療や意見が求められた。スポーツ外傷に対する鍼治療では理学療法士やスポーツドクターと協力しながら行うことが基本であり、稀に鍼単独での治療となることがあった。理学療法士のスタッフは多くいたが、鍼の専門家は筆者1人であった。当該クリニックのスタッフからは「ベンフィカ・イズ・No.1だ。それを忘れるな。」と常に声をかけられたことがとても印象的であった。

治療にあたっては、理学療法で治らない、あるいは治りにくいといった患者、もしくは理学療法においてあともう少しというところで効果が十分にでない、という患者を優先して鍼を行うという方針であった。これはその他の患者を治療しないということではなく、もし、そのような患者がいれば、優先的に治療するという意味である。

当該クリニックにおいて筆者は、電気を使った鍼治療（鍼通電療法）はほとんど行わなかった。当該クリニックの患者（選手）は、鍼通電療法に慣れておらず、かつ、初めて鍼治療を受けるものが多いことがその理由である。つまり、過剰刺激を避けるためである。そのため、主として、電気を使用しない鍼治療に加えて、ポットバック/アイシングの同時刺激法または交換刺激法¹⁾などを用いて治療を行った。ちなみに、同時刺激法とは、鍼の補助療法としてホットパックとアイシングの刺激を同時に行う治療法であり、交換刺激法はホットパックとアイシングの刺激を一定時間で入れ替える治療法である¹⁾。

筆者が当該クリニックに出向した当初、理学療法主任から、「とにかく選手を治してくれ。」と言われた。

治療が進むにつれて、選手のケガの状態や治療法、注意点、試合や練習を休ませた方がいいのか否か、などの相談を絶えず受けることとなった。

鍼治療の依頼としては、理学療法だけでは痛みが止まらないため、選手の試合出場のために急遽痛みを止めてくれというものもあった。

筆者が理学療法主任から選手のケガの状態について説明を求められた時、MRI または CT を撮影した方がよいとアドバイスすると、実際にそれらの検査が行われ、その結果、筆者が指摘した箇所に異常が認められることもあり、非常に慎重なアドバイスが必要であると感じた。なお、ベテランの理学療法士だけでなく、時には新人の理学療法士と協力して治療を行うことがあり、筆者にとって非常によい経験となった。

治療対象選手はサッカーや柔道、バレーボール、フットサル、陸上競技、ビリヤード、ローラーホッケー、器械体操、クラシックバレーの選手など、多種多様であったが、多くの症例において理学療法士とのコラボレーション治療を行なった。

コラボレーション治療では、鍼治療後に理学療法を行ってもよいのか否かを理学療法士が常に筆者に確認するため、筆者は特に炎症が強くない限りは理学療法を行うことは全く問題がなく、鍼治療と理学療法の相乗効果によって治療効果が高まると答えるようにした。実際にこれまでのところ、悪化症例については報告されていない。なお、筆者は鍼治療前後において必ず、理学療法士とともに治療効果の確認を行った。

筆者は、ポルトガルのクリニカ・ツチャ¹⁾で研修を受けた後に、クリニカ・ベンフィカに出向したことが大変有意義であったと感じている。文化や環境、人種、クリニックの人員構成の相違、主訴や主訴の訴え方の相違(言語や表現の違い)など、日本とは異なる状況下で治療を行う必要があることを、本臨床経験を通じて理解していたことが、円滑な治療に役立ったと考えている。また、筆者自身がポルトガルでは外国人であるということを忘れずに治療にあたることを絶えず意識していたが、これにより、コミュニケーションの齟齬を回避することができたと考えている。

2) ERISA での活動

筆者は ERISA において、鍼医学の専門家としての観点からの意見や活動を求められた。筆者は ERISA の「健康科学と技術の研究委員会 (Nucleus of Research in Health Sciences and Technologies)」のメンバーでもあり、随時、科学的研究や鍼医学の専門家としてのアドバイスなどを学生をはじめ、ERISA の教員にも行った。また、ルゾフナ大学スポーツ科学大学院博士課程の学生に対し、鍼に関するスポーツ科学の研究指導を依頼されたこともあった。

次に、ERISA での筆者の具体的活動について記載する。

1. 特別講演会での講演

ERISA にて特別講演会が開催され、当該講演会のためにポルトガル医師会よりリュウマチ科の最高顧問であり、線維筋痛症の専門家でもある医師が派遣された。また、ERISA のパウロ・サルゲント学長やモニカ・テキセイラ副学長なども参加された。当該講演会は ERISA 学生、医師、リスボン新大学医学部学生などを対象にした講演会であり、ポルトガル医師電気鍼協会およびポルトガル統合医療連盟、ERISA、ポルトガル医師会共催の講演会でもあった。筆者は「筋骨格系の痛みおよび線維筋痛症に対する鍼治療と日本鍼灸の紹介」のタイトルにて、「明治国際医療大学および日本鍼灸の紹介」、「筋骨格系の痛みと線維筋痛症に対する鍼治療」などについての講演を行った(図5)。



図5 ERISA での特別講演会

2. 看護学国際シンポジウム

看護学国際シンポジウムが ERISA およびルゾフナ・グループ主催で開催された。

ERISA の看護学部長から当該シンポジウムにおいて、「痛みの治療に対する鍼医学独自の観点と方論」についての講演を依頼された。西洋医学の薬物療法や心理学的視点からの講演は別の専門家が行うとのことであった。

筆者の講演では、本学名誉学長である矢野忠 先生からアドバイスを頂き、「鍼医学の非常に重要な特徴は自然治癒力を賦活する点にある。」ということを経験した。また、その自然治癒力を効果的に引き出すのが、鍼医学において経絡経穴系とよばれる経穴(ツボ)のシステムであるという主旨の講演を行なった(図 6)。



図 6 「痛みの治療に対する鍼医学独自の観点と方法論」の講演

3. 聖ジョアン・デ・デウス病院 (ルゾフナ・グループ) への出向

当該病院は、内科、神経内科、呼吸器科、内分泌科、心臓病科、脈管科、外科、整形外科、スポーツ科、形成外科、眼科、皮膚科、小児科、精神神経科、足科、歯科、などがある総合病院である。

ERISA のモニカ副学長から「前立腺癌 化学療法後の排尿困難に対する鍼治療の方法」を当該病院にて教えて欲しいとの依頼を受けて出向した。筆者の出向は、ERISA 教員が当該病院にて鍼治療を行なっていることが関係していた。

4. 鍼と中国医学の世界大会(WCATCM)での講演

ポルトガルのエストリルで行われた「鍼と中国医学の世界大会」での講演をモニカ副学長に依頼され、ERISA(ルゾフナ・グループ)を代表して講演を行った。当該世界大会には、ポルトガル、スペイン、フランス、ドイツ、イギリス、米国、中国、キューバ、台湾、ブラジル、ガボン共和国、オーストラリア、など様々な国から講演者が招待されていた。図 7 は学会場の写真である。当該世界大会はいくつもの会場に分かれていたが、筆者の講演はメイン会場で行われた。



図 7 WCATCM 世界大会会場

筆者は「Acupuncture in the Ophthalmology Field and Its Possibilities-Especially Visual Acuity and Eye Fatigue-(眼の領域における鍼治療とその可能性-特に視力と眼精疲労-)」のタイトルにて講演を行った。当該講演では、筆者は日本の明治国際医療大学から派遣されていること、日本鍼灸についての紹介、および眼の領域に対する鍼治療の可能性などについて発表した。

5. ERISA での授業

対面および遠隔授業を含む全ての授業は、主として、筆者とモニカ副学長および授業の単位認定者の 1 人であるエミディオ氏(専門は伝統中国医学)との協議の上、実施された。授業対象は ERISA 鍼学部で学んでいる学生であった。

- ① 1 年生に対する対面授業として「日本式の鍼医学における脈診と腹診」のタイトルにて講義と実技が行われた(図 8)。教員や参加学生からは、「日

本式のものは中国のものとは、また違って大変興味深い。日本式のやり方はとても分かりやすい。」との意見を頂いた。モニカ副学長からは授業の御礼を含め「全てのコラボレーションに対して、明治国際医療大学に感謝する。」との謝辞を頂いた。

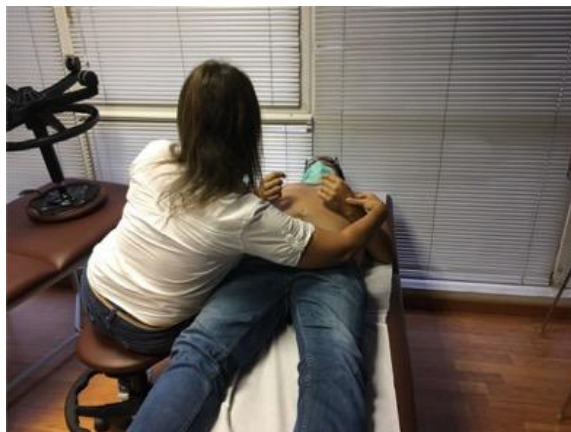


図8 ERISAでの実習（脈診）

- ② 2年生に対する2時間の遠隔講義が「眼に関する鍼灸診察とその治療-特に眼精疲労と視力について-」のタイトルにて行われた。教員や学生からは「難しくなく、シンプルで分かりやすかった。本当に役に立つ授業だった。」との意見を頂いた。
- ③ 2年生に対する2時間の遠隔講義が「日本とポルトガルにおける鍼の専門家としての経験」および「スポーツ外傷に対する鍼治療：2症例に対する考察」のタイトルにて行われた。
- ④ 3年生に対する5時間の遠隔講義が行われた。本授業はエミディオ氏と共同で行われた。最初にエミディオ氏が東洋医学における「虚」について講義し、その後、筆者が「Deficiency Case of Ear Problem in Acupuncture-Excess Pattern-(耳の症状における虚の症例と鍼)」および「Deficiency Case of Nose Problem in Acupuncture-Excess Pattern-(鼻の症状における虚の症例と鍼)」の講義を行った。参加学生数は70名であった。
- ⑤ 東洋医学に関する5時間の共同遠隔講義が行われた。エミディオ氏が東洋医学における月経困難症の1症例「虚」について講義し、その後、筆者が「Case of Acupuncture-Deficiency Pattern-(虚の4症例と鍼)」について講義を行った。当該講義では耳鳴や鼻炎などに対する鍼治療について教示した。教員や学生からは「大変興味深い症例(授業)であり、より多くの症例を提示して欲しい。」との意見を頂いた。参加学生数は48名であった。
- ⑥ 東洋医学に関する5時間の共同遠隔講義が行われた。エミディオ氏が東洋医学における全般的な「実」について講義し、その後、筆者が「Case of Acupuncture-Excess Pattern-(実の症例と鍼)」について講義を行った(図9)。症例は突発性難聴の鍼治療について教示した。参加学生数は81名であった。本授業では、英語をあまり理解しない学生が多く参加しており、エミディオ氏が筆者の英語をポルトガル語に訳しながらの講義であった。

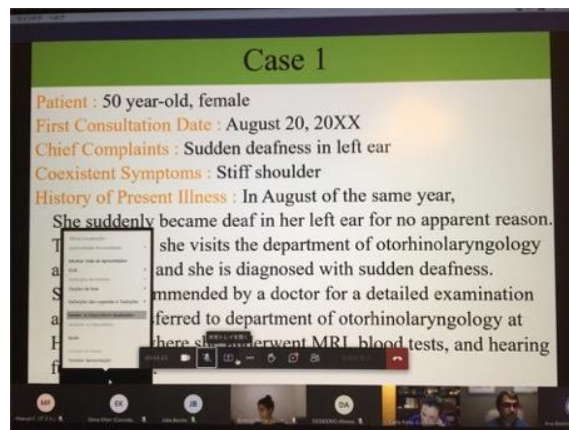


図9 ERISAでの遠隔講義

- ⑦ 共同対面講義が行われ、筆者が「Specific Effective Point Treatment in Acupuncture for the Eyes-Especially Eye Fatigue and Vision-and Theory of Correspondence of Eye Areas to Organs (眼の特効穴鍼治療-特に眼精疲労と視力-) および五輪の説について」のタイトルにて講義を行い、次に、エミディオ氏が全般的な伝統中国医学における脈診の講義および実技を行った。参加学生数は12名であった。エミディオ氏からは「素晴らしい授業に感謝する。」との謝辞を頂いた。
- ⑧ 3年生に対する対面授業として「Japanese Style Abdominal Diagnosis and Japanese Style One

Hand Intubation Technique（日本式の腹診と片手挿管法）」の講義と実技が行われた（図 10）。参加学生数は 16 名であった。学生からは「これまでは、腹診についてはよく知らなかったので、とても興味深い授業だった。」との感想が聞かれた。



図 10 実技(腹診・刺鍼)のデモンストレーション

- ⑨ 3 年生に対する対面講義として「Filiform Acupuncture Needle and Spoon Acupuncture Needle (Teishin) in Japanese Style: 日本式の毫鍼と鍔鍼による治療」が行われた。参加学生数は 12 名であった。モニカ副学長からは、「ポルトガルおよび ERISA における鍼の発展に御協力を頂き、感謝する。これからも是非、継続して協力して欲しい。」との謝辞を頂いた。

III-3. 日本への帰国後に行った ERISA などの教員に対する「鍼の専門職学位授与審査会」

以下に、ERISA などの教員に対する「鍼の専門職学位授与審査会」について記載する。

2023 年にモニカ副学長から、「公的な鍼の専門職学位授与における学位審査に御協力を御願いたい。」との連絡を受け、その後、IPLUS0（ルゾフナ・グループ）から学位審査会での審査に関する連絡があった。

これにより、筆者は学位審査会の審査委員に就任し、ERISA などの教員を含む 9 名の教員に対する鍼の専門

職学位授与の審査を行った。本活動は国際学術交流という意味において、非常に重要な意義をもつと考えられた。モニカ副学長によると、専門職学位を持たない場合、ERISA のような高等教育機関において、教員として鍼を学生に教えることができなくなるとのことであった。

筆者は明治国際医療大学に勤務のため、リスボンで行われる学位審査会にはオンラインでの参加となった。学位審査会は 6 月の 4 日間に計 27 時間にわたって行われた。夏季はポルトガルと日本の時差は 8 時間であり、学位審査会は現地時間の午後 1 時（日本時間の午後 9 時）から行われることが多かった。1 回の学位審査会では 2～3 人の学位申請者の審査が行われ、6～7 時間が費やされることが多かった。学位審査に先立って、学位申請者の学歴、職歴、学位論文などが送付されてきた。

学位審査会では、各学位申請者による自身の学歴および職歴に関する発表とその内容に関する質疑応答が行われ、次に、学位論文の発表とその内容に関する質疑応答が行われた。その後、学位審査委員による学位授与の可否に関する合議が行われた。なお、学位審査会は審査委員長 1 名、審査委員 5 名で構成された。

これらの審査を誠実に遂行したことにより、ERISA のパウロ学長とモニカ副学長から「明治国際医療大学のとても親切な御対応と御協力に心から感謝する。」との謝辞を頂いた。

IV. 考察

クリニカ・ベンフィカでは、スポーツドクターだけでなく、主として、理学療法士と協力して治療にあたる事が多く、お互いその長所を生かして治療することが相乗効果を生んだと感じている。お互いを尊重しながら、時には考え方や知識、経験などを冷静に照らし合わせてみて治療を行うことが有効であったと考えている。そのような意味において、お互いを尊重しながら、医師や理学療法士、看護師、その他の医療従事者と協力することが、鍼医学を含めて互いの長所を最大限に生かすことにつながるのではないかと考

えている。

第1報¹⁾でも指摘したことであるが、筆者の留学研修経験から、日本とは環境が異なる外国において鍼医学や西洋医学を学び、かつ、患者の治療や学生などに講義や実技を行うことにより、日本を外国との関係において相対的にみることや、患者のバックグラウンドを踏まえた上でのより効果的な治療を行うことが可能となるように感じられた。これらは、教育者、研究者（科学者）、臨床家、国際学術交流の実践者としてのアイデンティティの確立やこれらの活動に必要な自我の強化にも有用であると考えている。

また、筆者は「国際学術交流」そのものが、鍼灸だけでなく他学部においても重要な学術、学問領域になり得ると考えている。このことも含めて、海外留学研修で得た経験や実践的知識などを十分に活用し、かつ、これまでに本学で学ばせて頂いたことも併せて、その知見を整理・応用・発展させることにより、日本での活動に軸足を置きながら、世界的視野をもち、教育・実践的研究・臨床・国際学術交流の進展、などに寄与していきたいと考えている。

V. 結語

筆者は2019年1月から2022年5月まで、明治国際医療大学と包括的学術協定を締結しているポルトガルの各施設において業務を含む留学研修を行った。

ポルトガル医師電気鍼協会、ポルトガル統合医療連盟、Clinica Tsuchiya, Sport Lisboa e Benfica, ERISA (ルゾフナ・グループ)などにおいて国際学術交流活動を行ったが、本報では主に、Sport Lisboa e BenficaおよびERISAでの国際学術交流について報告した。

謝辞：貴重なポルトガルへの留学研修の機会を賜りました明治東洋医学院 谷口和彦理事長、明治国際医療大学 矢野忠名誉学長に深く感謝を申し上げます。

日本に帰国後も国際活動に御理解、御協力を賜っております谷口和彦理事長、勝見泰和学長、矢野忠名誉

学長、川喜田健司特任教授、本学教職員の皆様に深く感謝を申し上げます。

また、ポルトガルの土屋光春教授、ジョアン・アルメイダ教授、ジョアン・カスカイス教授、故マーチン・ピシコ教授、パウロ・サルゲント学長、モニカ・テキセイラ副学長に感謝を申し上げます。

文 献

1. 鶴 浩幸：ポルトガルにおける国際学術交流の実際 第1報（ポルトガル医師電気鍼協会、ポルトガル統合医療連盟、クリニカ・ツチヤにおける活動）-鍼医学を中心として-。明治国際医療大学誌，31：41-53, 2024.

**International Academic Exchange : Actual International Academic
Exchange in Portugal The 2nd Report
(Activities in Sport Lisboa e Benfica and ERISA)
-Focusing on Acupuncture Medicine-**

Hiroyuki Tsuru^{1), 2), 3), 4), 5), 6), 7)}

¹⁾Department of Acupuncture and Moxibustion, Meiji University of Integrative Medicine,

²⁾International Exchange Promotion Center, Meiji University of Integrative Medicine,

*³⁾Clinica Tsuchiya (Portugal), ⁴⁾A.P.A.E.Medical Doctors Group(Portuguese Medical
Electroacupuncture Association), ⁵⁾Federação Portuguesa de Medicina Integrativa*

(Portuguese Federation of Integrative Medicine), ⁶⁾Sport Lisboa e Benfica,

⁷⁾Escola Superior de Saúde Ribeiro Sanches (ERISA University, Lusófona Group)

Abstract

From January 2019 to May 2022, the author conducted study abroad training with work at various facilities in Portugal that have concluded comprehensive academic agreements with Meiji University of Integrative Medicine.

Whereas the 1st report focused on the international academic exchange activities regarding A.P.A.E. Group of Doctors, Federação Portuguesa de Medicina Integrativa and Clinica Tsuchiya, this 2nd report focuses on activities regarding Sport Lisboa e Benfica and Escola Superior de Saúde Ribeiro Sanches.